

10 自宅退院した高次脳機能障害者の主介護者が抱く介護肯定感

病院看護部 3階病棟 河野久美 曾根愛美 榊原まゆみ

目的高次脳機能障害は外見上障害がわかりにくく、生活をともにする家族は、介護負担や不安を抱くため、介護の肯定的側面を情報提供することが重要であると考えた。そこで、自宅退院した高次脳機能障害者の主介護者が、在宅生活において抱く介護肯定感を明らかにする。

研究方法在宅生活中の高次脳機能障害者（以下：要介護者）の主介護者に、半構成的面接をおこなった。面接内容を書き起こし、介護肯定感と思われる内容をコード化し、質的記述的に分析をおこなった。

結果1. 主介護者の属性(表1)

インタビューを実施した主介護者は9名、年齢は30歳代前半から60歳代後半、退院後の生活期間は、4ヶ月から19ヶ月。要介護者の年齢は、20歳代後半から60歳代後半であった。

2. 主介護者が抱く介護肯定感(表2)

合計75のコードが抽出され、3つのカテゴリーと11のサブカテゴリーに分類された。

考察1. 主介護者と要介護者の属性

今回の要介護者は、復職や社会福祉制度を利用している割合が高く、これは主介護者の介護時間の減少や介護負担や経済的不安の軽減につながると考える。

2. 各カテゴリーについて

カテゴリー1：要介護者との良好な関係性の継続

発症前の良好な家族関係は、発症後も維持できることが多く、主介護者は現実をあえて受け止めない行動や、お互いの距離を図る工夫をしていた。それは、将来への不安を抱かないための対処行動とも考えられる。また、発症を契機に要介護者の性格が優しく穏やかに変化したことで、新たな家族関係を築くことが出来たと考える。

カテゴリー2：発症を契機に要介護者がかけがえの無い存在であると実感

主介護者は要介護者を失うかもしれないという恐怖感や危機感を抱いたことで、相手をかけがえのない存在であると感じ、当たり前な生活が送れることの素晴らしさを実感することができたと考える。

カテゴリー3：要介護者の回復に向けた希望

主介護者は要介護者の症状が改善すると、日々の積み重ねによる成果であると満足感を抱き、更に良くなってほしいという漠然とした期待を抱いた。そして、要介護者が社会との関わりを持つことは、回復の目安であり、就労に対して前向きな考えや、社会参加できている現状に対して安心感を抱いていると考える。

結論

自宅退院した高次脳機能障害者の主介護者が抱く介護肯定感は、要介護者の【発症を契機に要介護者がかけがえの無い存在であると実感】したことと、【要介護者との良好な関係性の継続】が考えの根底に存在する。そして、主介護者は【要介護者の回復に向けた希望】を持ちつつ、要介護者との良好な関係性の構築が図られていることが明らかとなった。

表1. 主介護者の属性 n=9

ID	続柄	年齢	退院後の生活期間 (ヶ月)	要介護者の 年齢	要介護者の 就業	要介護者の社会 福祉制度の利用
A	父	60歳代後半	6	40歳代前半	なし	あり**
B	母	50歳代後半	4	20歳代後半	なし	あり**
C	母	60歳代後半	13	40歳代前半	あり*	なし
D	娘	30歳代後半	15	60歳代後半	なし	あり**
E	夫	30歳代前半	19	20歳代後半	あり*	なし
F	夫	50歳代前半	13	30歳代後半	なし(主婦)	なし
G	夫	60歳代前半	19	60歳代前半	なし(主婦)	なし
H	妻	50歳代後半	9	50歳代後半	あり*	なし
I	妻	40歳代前半	7	40歳代後半	あり*	なし

※受傷前の職場への復帰(就業時間の短縮や配置転換あり)

**地域で提供されているデイサービスやパソコン教室などの利用(通所)

表2. 主介護者の抱く介護肯定感

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 要介護者との良好な関係性の継続	発症前からの要介護者との良好な関係性
	要介護者との良好な関係性維持のための工夫
	要介護者との生活を納得させるための自分なりの理由付け
	要介護者の性格が優しくなったという認識
	要介護者との良好な関係性の再構築
2. 発症を契機に要介護者が かけがえの無い存在であると実感	要介護者の存在の大切さの再認識
	要介護者とともに生活することの素晴らしさの再認識
3. 要介護者の回復に向けた希望	要介護者の症状の改善を実感
	要介護者の症状の改善に対する漠然とした期待
	家族として今やれることをやろうとする介護意欲の亢進
	要介護者の就労を奨励する気持ち